

企画名： 「福島市民の活動から見てくるもの」

実施日時： 1月15日（日）10：00～11：30

実施場所： パシフィコ横浜会議センター 2F 211+212

登壇者： 佐藤真紀（JIM-NET 事務局長）

小玉直也（JIM-NET 職員）

佐々木道範（チーム二本松代表）

志田守（ハーメルンプロジェクト代表/安全・安心・アクションin郡山）

参加人数： 約140名

文責： 佐藤真紀（JIM-NET 事務局長）

本企画の狙いは、震災後福島の中通の市民らが立ち上げた団体の代表をゲストに向かえ、今何が問題なのか、生の声を聞き、私たちに何が出来るのかを考えることです。それぞれの団体から、どうして団体を立ち上げたのか、今の活動を簡単に紹介してもらい、続いて

1) 除染、2) 避難、3) 食の安全、4) 福島をどう伝えるか

といったテーマについて話し合いました。幼稚園も経営する佐々木さんは、「待つてはいられなかった」と自ら除染チームを立ち上げました。しかし、問題は放射線廃棄物を仮置きする場所も政府はきめられず、自治会に丸投げ状態です。

食の安全に関しては、市民測定所が立ち上がっています。チーム二本松は、測定器を持ち食品の検査を行なっています。明治の粉ミルクからセシウムが検出されると佐々木さんは、赤ちゃんのことを心配してデータを公表します。40万個の粉ミルクが回収されましたが、マスコミは、対応が遅れた明治を批判します。「問題が明治批判になってしまい、原発事故という本質的な問題が置き去りにされた」と佐々木さん。郡山の野口さんは、1月から測定所をオープン。「給食で郡山のお米を検査もきちんとしないまま出していることに心を痛める」との発言

避難に関しては、郡山の志田さんが、ハーメルンプロジェクトと称して、疎開や避難先を見つけることに奔走。政府は、避難の権利をなかなか認めず、渡利地区では、避難勧奨地点を認めず、国が責任を持って除染すると言いながらも放射線汚染土などを保管する場所も決まらず、時間がたつとともに被曝している現状も。

「毎日わが子の命にかかわる問題と向き合って、疲れ果てている。夫婦喧嘩も毎日のようにしている。みんなもう限界にきている。どうか福島を忘れないで、一緒に考えてほしい。」

「今までまったく社会問題について興味を持って来なかったが、無関心が原発を作り、この国を作っているとわかった。もっと自分から興味を持たなければ社会は変わらない」

「子どもと福島に残って本当に良かったのか、ずっと悩み続けている」

登壇者からの切実な訴えを会場に集まった人たちは、真剣に受け止め、自分達に何が出来るの

か考えました。これといった答えは出ませんでした、**「福島を忘れてはいけない」**ということだけは、しっかりと受け止める事ができたのではないのでしょうか？

